

吉田  
義助

## 来世、生まれ変わっても。

「遊女、梅川を遣っていた時のことです。  
太夫、三味線、人形の息がぴったり合い、  
舞台と客席もひとつになったと感じたとき、  
来世、生まれ変わって、  
再びあの辛い修業時代を送ったとしても、  
やはり人形遣いになりたいと思いました。」

遣って美しい、黄金の比率。

人形に命が吹き込まれる——人形遣いの至芸を言い表す際によく用いられる表現だが、その瞬間、立ち上ってくるのは“命”というより“情”だった。ときに熱く、ときに冷ややかで深く、静かな情を目の当たりにして、驚き、戸惑い、そして鳥肌が立った。世界無形文化遺産指定の伝統芸能「文楽」の殿堂ともいえる国立文楽劇場の一室で、師匠が手にしたのは、(心中宵庚申) (しんじゅうようごうしん)のお千代。その手が人形に触れたかどうかの瞬く間に人形は生氣を取り戻し、(お千代)になった。物憂げに宙に視線を投げたり、取り巻く人々の心を透かし見るような表情を見せ

たり。撮影のライトを煩わしそうに避ける  
仕草は、どこから見ても“生身”の女性だ。  
十数年前に病に倒れ、闘病とリハビリを  
経て今があるとは到底思えない。なるほど  
世界が遺産とした芸能、日本が国宝とした  
妙技だ。文楽の振興にも尽力され、この度の  
取材にも快く応じてくださった。その文面  
には、人形を遣う際と同じ、こまやかさ、  
真摯な心が薫った。

——お父様も人形遣いでいらしたどうか  
がっています。ご幼少の頃の文楽における  
環境はどのようなものだったのでしょうか。

「三、四歳の頃から父について、大阪の  
四ツ橋にあった文楽座に通ったものです。  
別段、何をするというわけでもないです  
が、毎日飽きもせず、楽屋中をちよこまか  
と歩き回っていました。小さい頃から文楽  
一辺倒の環境でした。」

——当時の文楽と、現在の文楽を比べてみ  
たとき、違いをお感じになることはありま  
すか。

「今の劇場はどこも近代的な設備が整っ  
て、芝居の“匂い”というものがありません  
ね。昔の劇場は大道具のニカワの匂いがぶん  
と漂ったりして、その匂いを嗅ぐと、ああ、  
いよいよ初日だな」と胸が高鳴ったもので  
す。昭和二十年の大阪の空襲で文楽座が  
焼け、人形の首も衣装も消失してしま  
いましたので、私の子ども時代のものとの今  
ものでは、首ひとつとつても違いますね。」  
——人形遣いの道に進もうとお決めた

たのはいつ頃でしょうか。また、その決意を  
後押ししたできごとなどがありましたら、  
お聞かせください。

「私が六歳の頃、最初の師匠である吉田  
文五郎師匠から父に、「正式に人形遣いにし  
てはどうか」という打診があったようです。  
ずっと文楽の中で育ってきましたから、自分  
は人形遣いになるもの」と思っておりまし  
たので、師匠の言葉をきっかけに、ごく自然  
に人形遣いの道に進みました。」

——修業時代はいかがでしたか。昔は冷房  
もなく、頭巾をかぶつての舞台はさぞや大  
変だったのではと思われませんが。

「まだ正式入門前、六歳ぐらいの頃の話  
ですが、父が遣う、あまり動きのない役の  
足を持つていた時のことです。じっとしてい  
ると眠くなり、そうなるを持つている人形  
の足の位置が下がっていきます。普通なら  
叱られるところですが、そこは親です。人  
形の右手で、誰にも分からないように、足  
を支えていてくれました。また、〈恋女房  
染分手綱〉(こいにようぼうそめわけたづなとい  
う演目で、師匠が重の井という、ある大名  
家の姫君の乳母役で、私が生き別れになっ  
ていた、倅の三吉という子どもの役を遣っ  
た時のこと。地方での公演でしたが、悲し  
い母子の別れに感激したお客様が、舞台  
におひねりを投げこむのです。たくさん  
飛んでくるおひねりに、「舞台に立つという  
のは、すごいことなんだな」と子ども心に  
思ったものです。もちろん舞台の陰では、  
辛いこともありました。師匠の人形の足を



「文楽の人形は、大の男が長い修業の末、三人もかかって遣います。不経済なことですが、三人もかかるからには、三人の役目を噛み締め、一人でやる以上に、より美しく、より効果的に、そして最終的にはより感動的であらねば、三人もかかる意味がありません。」

遣っているときなど、女方の足は人形の着  
物の袴(かき)を持ちますから、しもやけの手が人  
形の着物の中で温かくなると、猛烈に痒く  
て痒くて。師匠以外の方の足を遣っている  
ときも、まずいことをすると舞台下駄で蹴  
られ、小道具の杖などで叩かれ…と、今で  
は考えられない、そんな修業時代でした。」  
——とくに好きな役、人形、作品などはお  
ありですか。

「好きな役はたくさんあります。なかでも  
〈酒屋〉(艶容女舞衣/はさすがたおんなまいぎぬ)  
のお園。“サワリ”と呼ばれる見せ場は、女  
方の人形の美しさのすべてが凝縮されてい  
て、遣っているとき心地よく感じます。」

——これまでで最も印象に残る舞台につ  
いてお聞かせください。

「ずっと以前、〈封印切〉(冥途の飛脚/めいと  
のひきやく)で遊女、梅川を遣っていた時のこと  
です。太夫、三味線、そして人形の共演者の  
息がぴったり合い、そして舞台と客席もひ  
とつになつた空気が伝わってきたとき、口で  
は表現できないほどの感動を覚えました。  
来世、生まれ変わって、もう一度あの辛い  
修業時代を送ったとしても、やはり人形遣  
いになりたい、人形遣いという道を選んで  
よかつた!と感じた舞台でした。」

——文楽の人形は、不思議なバランスで、独  
特の魅力、オーラがあるように感じます。  
人形遣いであるご自身の目には、人形たち  
はどのように映っていらっしゃいますか。

「不思議なバランスとは全く感じたこと  
がありません。その大きさや手足のバランス



### 【よしだみのすけ】

文楽人形遣い。文楽を代表する立女方。文楽人形遣い桐竹紋太郎を父に持ち、1940年3世吉田文五郎に入門。42年桐竹紋二郎と名乗る。翌年初舞台。48年2世桐竹紋十郎門下となる。61年3世吉田義助を襲名。以来、当代一の立女方人形遣いとして活躍。可憐さのある人形表現で知られる。70年芸術選奨新人賞受賞。94年重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定。96年に紫綬褒章、97年には芸術院賞を受賞。98年脳出血のため楽屋で倒れるもリハビリの末、翌年夏の公演で奇跡的なカムバックを果たす。06年には5度目のフランス公演を行い、07年にフランス政府より芸術文化勲章コマンドゥールを受章。著書・共著に『頭巾かぶって五十年 文楽に生きて』『吉田義助写真集』のほか、山川静夫著による『文楽の女～吉田義助の世界～』『吉田義助と山川静夫 華舞台へ帰ってきた。脳卒中・闘病・リハビリ・復帰の記録』がある。33年大阪府生まれ。



「文楽の人形遣いの修業そのものが教えられるものではなく、言葉は悪いですが、勝手に盗むもので、しかも、自分の技量分だけしか盗めないものですから、段階を越えたことを教えられてもわかりません。（中略）盗んだものを基本にして、自分で自分なりの方法を編み出すしかありません。人形遣いの修業はそんなものです。」

は、人形遣いが手にして、三人で遣った時に美しく見える黄金の比率だと思えます。」

### 舞台に立つことがすべて。

——半世紀以上も携わつてこられ、今、あらためて感じになる「文楽」という伝統芸能の面白さ、人形遣いとしての醍醐味とは何でしょうか。

「人間では表現し得ない、人形ならではの美しさが文楽にはあると思います。人間では生々すぎる場面でも、人形だとその役本来の姿が際立って、物語の本質がよく見え、伝わるがあると思います。」

——ご病気を経験され、今、強く思われることはどのようなことですか。また、現在は人間国宝という重責を担うお立場ですが、それについてはどのように思われますか。

「舞台に立つことは私のすべて。健康で、できるだけ長く舞台に立ち続けたいとさらに強く思います。ただ、国宝だから……と意識して舞台に立つたことは一度もありません。芸に対する考え方や姿勢も、国宝になる前と後では全く変わっておりません。」

——静岡県出身であり、グランシップでは公演に先立ちレクチャーなどを務めてくださる山川静夫さんとは、長いおつきあひとうががっています。ご自身にとって山川さんほどのような存在でいらっしゃいますか。

「山川静夫さんとは同い年で30代からの付き合い合いです。同じような年代に、同じ

ような病気をし、リハビリに耐え、ともに表舞台に還つてくることができました。畏友であると同時に戦友でもあります。」

——この十月は、グランシップで舞台を拝見できるとのことでも楽しみます。  
〈双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段〉(ふたつちようちようくるわにつきやわたのさとひきまどのだん)の見所などについてお話しただければ幸いです。

「〈引窓〉という、明かりとりの天窓がこの芝居では重要な役目を果たします。開ければ昼の光、閉ざせば夜の闇、登場人物の心の葛藤を、この引窓が巧みに表現しています。あまり種明かししすぎると、ご覧になられる楽しみが薄れるので解説はこのぐらいにいたします。私が遣うおはやという役は、もと遊女。今は結婚して人妻となつていますが、立ち居振る舞いに、華やかであつた頃の名残がつい出てしまうことがあります。それはどこか……と考えながらご覧いただくのも一興かと思えます。」

——静岡県内で定期的に文楽が鑑賞できるのは、残念ながらグランシップだけです。今回の公演を楽しみしている県民にメッセージをお願いします。

「毎年十月に静岡へうかがえるのを楽しみにいたしております。ことに今年はこの静岡の地で、千種楽を迎えます。今年も多くのお客様にお目にかかれることを祈念して、舞台を精一杯努めます。」

## 10/17<sup>月</sup> チケット発売中!

### グランシップ伝統芸能シリーズ

# 人形浄瑠璃 文楽

**昼の部 13:30開演(13:00開場)**  
「双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段」「新版歌祭文 野崎村の段」

**夜の部 18:30開演(18:00開場)**  
「団子売」「摂州合邦辻 合邦住家の段」

グランシップ 中ホール・大地  
全席指定 / 一般 3,500円 昼夜通し券 6,300円 学生 1,000円

